
フルアーマー・クロスドレス

夢一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フルアーマー ・ クロスドレス

【Nコード】

N1219Y

【作者名】

夢一

【あらすじ】

呪いによって男物の服が身につけられなくなった少年マモリの、呪いを解くための冒険。

1・英雄の息子マモリ

> i 3 4 0 7 3 — 4 3 2 0 <

15年前、世界は一度魔物に支配されかけた。
だが一人の男が命をかけてそれを阻止した。

男は最強の魔法『フルアーマー』を駆使し、邪神アスモデウスを倒した。

世界に平和がおとずれた。

そして現在…

> 小王国・スタートロイ<

「きゃーー！！！」

きぬを裂くようなありきたりな悲鳴が小さな城下町に響く。

街中をいつものように歩いていたその女性は、突然空から現れた人でも動物でもない生き物に驚いた。

「ババロンだ！」

「またか！最近多いな！」

「と、とにかくあの娘を助けないと!」

近くにいた大の大人たちがしどろもどろになりながら空から現れた存在を威嚇する。

ババロンと呼ばれたそれは、さながらプテラノドンのような姿をしていた。

大の男より一回り大きく
槍のように尖った口と牙。

翼には羽毛などはなく、薄い皮だけ。
足には鋭い鍵爪。

プテラノドンと違うのは、翼の他にも人間のような手が生えていることだ。

これが近頃スタートロイの街を騒がせてる魔物である。

「早くしないとあの娘が!」

魔物に立ち向かうのに躊躇する大の大人たち。
そこに…

「…まあ待ちなよ」

ピンク色セミロングの髪をなびかせ、余裕の笑みを見せながらいかにもケンカに弱そうな線の細い少年が男たちの前に出た。

無地のＴシャツにハーフパンツ。少年さながらのその格好でババロンを見据える。

「おお!マモリ!」

「マモリちゃん!」

「いいところに来てくれた！」

「いつものあれ頼むよ！」

「わかってるよ！…待っててよ、そこのお姉さん！」

言うなり少年は生身のままババロンに向かって駆けていった。

「フルアーマー・真空剣！！」

そう叫んだ、いや、唱えたマモリの姿は、一瞬緑色に輝いた。

次の瞬間には胸元から肩にかけて贅沢な装飾のあしらわれた強そうな鎧。

肩からはマント。

マモリは西洋の甲冑を豪華にしたような鎧を身に纏ってさらに勢いを増してババロンに突っ込んでいく。

そしてその手にはさっきまでなかったはずの大剣が握られていた。

「ギギッ！」

危険を察知したババロンはすぐに女性を諦め飛び立った。

「逃がさないよ！次またいつ襲いに来るかわからないからな！」

マモリはその手の剣を大きく振り上げ…

「ハーーーー！！！」

振りおろした。

ビュウウン

降り下ろされた剣から真空波が生じ、直線軌道でそのままババロンの体を真つ二つにしてしまった。

切断されたババロンの体はそのまま森の方へ落ちていく。

「ふう」

「おおおお！」

「やったー！さすがマモリ！」

「風の剣だ！かっこいい！！」

「いやぁ…最強の魔法フルアーマー、いつ見てもゾクゾクするな」

「あの变身っぷりもすごいけど、すごいのはやっぱりあの武器と鎧さ！」

「ああ！英雄ゼウが残した天下無双の武具だからな！」

「いやいや…それをああして自在に操るマモリが結局一番凄いんだって！」

当人のマモリを差し置いて勝手に盛り上がる一部始終を見ていた街人たち。

マモリはそんな光景に慣れっこだった。

「マモリ…ありがとう。」

「え！？いや、いいよそんなの！」

お礼を言う女性に対して照れ隠しで答えるマモリ。

「それより怪我とかない？」

「ええ、大丈夫よ。お陰様で。それより本当にすごい魔法ね。世界中のどんな装備でも使いこなせちゃうんでしょ？伝説の武器だって…」

「うん。ていつても父さんが魔法と一緒に残してくれたやつだけだね。」

「それでも十分よ。マモリは十分すぎるくらいこの街と私たちを守ってくれてるわ。」

「やめてよ！…照れる。」

さっきまでの自信はどこにいったのか、真っ赤になるマモリ。

英雄ゼウ、マモリの父の活躍により世界が魔物に支配される危機は去った。

だがまだ魔物は統制を失っただけで、人の驚異としては存在しつづけている。

マモリは父から授かった魔法『フルアーマー』の力で微弱ながらもこの国を守る立場にあった。

「やはりここじゃったか…フルアーマーの魔法…」

褒められ喜ぶマモリと、またそれを見て嬉しくなる街の人々。そんな光景を上空から見届け、不適に笑う影があることに、まだ誰も気付いていなかった。

2・フルアーマー

<スタートロイ…町はずれ>

「ただいまー」

マモリは昼間の騒動を終えて町はずれの家に帰ってきた。
とたんにドタドタと騒がしい音が鳴り始める。

「おつかえりマモリーー！！！」

マモリと同じピンク色の長い髪的女性がに勢いよく抱きついてきた。

「ちよつ、くつつかないでよ母さん！」

「ええ！なんでよー。こんなに可愛い息子が帰ってきたらまずハグしてあげなくっちゃ！」

「もう俺16だよ？恥ずかしいって…」

「いいじゃん！誰も見てないんだから。キスもしてあげようか？」

「絶対やめて！」

彼女はマモリの母、アイリ。

英雄ゼウが死んだ後もマモリを女手一つで育ててきたアイリは、マモリのことを誰よりも可愛がり、愛していた。

アイリとマモリはスタートロイの城下町から少し離れた丘の上に住んでいるのだ。

「聞いたわよ？また魔物を倒して街の人助けたんだって？」

「はやっ！ついさっきの話なんだけど…」

「母さんにはなんでもわかるのよん。」

アイリはとても16歳の子がいるとは思えないと、街の人からもよく言われている。

だが実はもう30を過ぎているのだが、見た目は20代後半、性格は20代前半といった感じだった。

「まさか…俺のこと盗撮するような魔法使ってないだろうな…？」

「…それいいわね。」

「おい！」

「うそうそ。そんな魔法知らないから。」

アイリは魔法使いとしても有能な方で、マモリに魔力の操作などを教えたのも彼女だった。

「でもフルアーマーの魔法、だいぶ使えるようになってきたわね。」

「まあね。まあ父さんのくれた装備がすごいだけけど。」

「それでも魔法自体をコントロールしないと、装備召喚もできないんだからね？」

「わかってるよ。だからまだ呼び出せない装備もたくさんあるんだ。」

「

『フルアーマー』の魔法は、亜空間にしまつてある武器や防具を一瞬のうちに呼び出して装備することのできる魔法である。装備召喚には魔力が必要だが、一度装備してしまえばどんな代物でも自在に操ることができる。

強力な魔法剣や特殊なもの…伝説といわれるものでも操れてしまうのが、この魔法が最強といわれる所以だった。

そしてこの魔法が使えるのも世界中でマモリだけなのだ。

「それに気をつけなさいよ？あなたの持つてる武器や防具を狙ってる悪い奴だってたくさんいるんだから。」

「大丈夫だよ。そういう武器ヲタなやつらに強いのはいないからね。」

「なんでそんなこと言い切れるのよ……」

マモリとアイリはそのまま家の奥に入り、アイリは夕飯の用意を始めた。

<スタートロイ…城下町…上空>

「ふむ…あの少年を追うのは簡単じゃが、それでは少し芸がないの……」

先ほどマモリを空から見ていた黒いローブの老人は考えていた。

そこに1匹のババロンが飛んできた。

近隣の森にはババロンが多数生息しており、スタートロイの人々の脅威となっている。

「下等手族か…まあこいつでもいいわい。」

そついいながら老人は右手をババロンの前に突き出した。

するとババロンの体はまるで後ろから引っ張られるようになり動きが止まる。

今度は左手を森の方向に向け、何かを引っ張るようにして自分の胸元にゆっくり引き寄せた。

直後、森が大きなざわめきに包まれ、たくさんのババロンが上空に飛び出した。

そのままたくさんのババロンは老人の目の前のババロンへと飛んできた。

いや、飛んできたのではなく引き寄せられてきたのだった。

「…魔獣合成…」

老人の眼の前でババロンたちは歪に混じり合い、大きくなる。
そこから粘土のように手足、翼、頭が現れる。

「ギギアアアアアアア!!!!」

ビルのように大きな姿になったババロンは、そのまま城下町に降りて行った。

3・巨大ババロン

<スタートロイ…マモリの家>

「…母さん、今何か凄い音しなかった？」

「ん…ドラゴンでも暴れてるんじゃないの？」

アイリは夕飯の用意をしながらマモリを適当にあしらった。

「この辺にドラゴンはいないだろ…」

マモリは腑に落ちないと感じつつも、とりあえず気にしないようにした。

「それよりマモリ…、ちょっと卵買ってきてよ！」

手がはなせないからと言うようにマモリに頼む。ずっと2人暮らしをしているため、こういう時のお使いくらいはマモリにとって当たり前だった。

「わかった。ちょっと待ってて！」

マモリはそういいながらパツと準備して家を出た。

「……うわああ……！」

突然大きな声をあげるマモリにアイリも駆けつける。

「マモリ！どうしたの!？」

そこには見たことない大きさのババロンの姿があり、今にも街を襲わんとしていた。

「何あれ!？」

「ババロンだよ！あんな大きさ…見たことないけど…。俺行っていく」

る！」

信じられない巨大さのババロンに驚きつつも、マモリは急いで街の方に走った。

「マモリ！母さんも行くわ！」

異常事態だと確信したのか、アイリもマモリを追って街に向かった。

「母さん…危ないから家にいなよ！」

「何言ってるの？私だって魔法使いとしては有能な方なのよ！」

「知ってるけど…！」

<スタートロイ…城下町>

突如として現れた巨大ババロンにより、街はパニックになっていた。王国兵士を筆頭に戦える者は前に出て巨大ババロンを攻撃している。巨大ババロンも大きな傷はつかないものの、動きづらいようだ。

「なんて大きさだ…」

「怯むな！足を狙え！」

「戦えない者は早く城の中に！」

「魔法が使える者は動きを止めてくれ！」

小王国スタートロイは、近隣そう強い魔物もおらず、貴重な資源もない小さな国だった。

それゆえ戦争などに巻き込まれることもなく、長年平和を維持していた。

だからこのような大型の魔物など相手は不慣れなのだ。

上空からその様子を見る黒ローブの老人。

「ふえふえふえ…町が危ないぞ…フルアーマーの少年よ…早く助けにこんか…」

そしてまたあの魔法を見せてくれ。」

<スタートロイ城>

「ええい！どうにかならんのか！？」

そう吠えているのはこの小王国を統治する痩せた体に髭をはやした男、スタートロイ王だ。

「国民のほとんどは場内に避難しました。ですがあの魔物自体はどうしようも…」

「この国の戦力はあのような大型の魔物に対応していませんから…」

「言われんでもわかっておるわ！…それでもどうにかせんと国が滅ぶだろう！」

「しかし…」

「…あのフルアーマーの少年…マモリが来れば…！」

常に王のそばで知恵を貸しているはずの大臣も今回は弱気だった。マモリはこの国で最も強い力をもっている。そのため国の人間はどうしてもマモリを頼りにしてしまう。

「バカ者！一人の少年に頼るな！ここはおまえたちの国でもあるんだぞ！！？」

<スタートロイ…城下町>

マモリたちが巨大ババロンの足元についたとき、兵士や街の人たちは傷だらけになりながら城に逃げて行くところだった。

「母さん！俺は空から一気にやるから足元で注意を引いて！」

「わかったわ」

巨大ババロンも2人の存在に気付いたようで、その大きな翼を羽ばたかせ、地面を蹴った。

強い突風が起き、2人はよろける。

「く…フルアーマー・滅竜剣！」

マモリが呪文を唱えると、今度は黄色に輝き、先刻の鎧とは別の鎧を身につけた。

全身に爪のような装飾、紫に輝くその鎧はどんな衝撃にも耐えれそうだ。

一番の特徴は、ドラゴンのような翼がついていたことだった。剣は巨大なのこぎりのような形をしている。

マモリはその背中の中翼で空に向かう巨大ババロンを追いかけた。

巨大ババロンは追ってくるマモリを迎撃しようと、手を大きく振り下ろす。

それをぎりぎりのところでかわすマモリ。

「アローレイ！！…マモリ！気をつけて！」

アイリは自分の息子に攻撃が当たらないように魔法の矢を打った。光の矢がまっすぐ空中の巨大ババロンに向かっていく。

アイリのもの打った矢は見事に巨大ババロンの目をとらえた。

「ギアア！」

巨大ババロンは体制を崩して高度を下げた。

そのままマモリはその巨体を抜き去り、頭の上で剣を構える。

「ハアアアア！」

マモリは剣を構えたまま急降下し、巨大ババロンの首を切り落とすた。

4・呪われたマモリ

<暗い部屋>

スタートロイから数百キロの地点。とある場所のとある部屋。部屋を暗くし、ベッドの中で話す男女。

「あのジジイ、大丈夫かしら？」

「心配ないさ。ああ見えても呪術師としては一流だし、頭もきれる。ただ心配なのは…変態だつてことだ。」

「ふふ、アレス様だつて…変態ですものね。」

？燭の灯に照らされて、2人は唇を合わせる。

「あの力だけは…放っておけんからな…」

<スタートロイ…城下町>

首を切られた巨大ババロンは、地面に落ちるかと思つたら黒い泡のようになつて消えていった。

「これは…作られた命だつたのね…」

アイリはこの魔法に知っているように、こぼした。

「母さん、知ってるの？」

マモリはすでにフルアーマーを解除していた。

「ええ、これは黒魔法よ。きつとこのあたりのババロン全てを合成させたんだと思う…。」

「そんな…誰がそんなことを!!?」

「はゝ可愛い顔してすごい力を持っているの…。」
2人の会話に割って入ってきたのは逃げ遅れた様子のおじいさんだった。

「な！大丈夫ですか!?!」

怪我をしているらしく、動けないようだった。マモリはすぐに駆けつける。

そこに母アイリが声を上げる。

「マモリ！待って!!」

「え?」

母の声を聞いたときマモリはその老人に肩を貸そうとするとところだった。

「ほほほ、ありがとう。お嬢ちゃん。」

マモリのことをお嬢ちゃんと呼んだその老人は、マモリの腕をつかみブツブツと聞こえない声で何かを囁きだす。

「おじいちゃん…俺男なんだけど…」

「マモリ！離れてっ!!」

…ドクン!!

心臓が跳ね上がるような感覚をマモリは感じた。
そう感じた瞬間、マモリの来ていた服が全て弾けとび、マモリは全

裸になってしまった。

「…え？」

訳がわからないといった顔をするマモリ。

老人はあつけにとられるマモリを置き去りにして杖に乗り宙に浮いた。

「うまくいったわい。呪いは直接体に触れなければかけられんからの。」

さっきまでの弱々しい雰囲気とは別人のようになったその老人は、マモリに呪いをかけたことを告げる。

「呪い…？」

「そうじゃ…フルアーマーの魔導師よ。貴様の中に眠るゼウの武具。それらを全て使えなくする呪いじゃよ。」

「え…？」

マモリは信じられないことを言われ、理解するのに時間がかかっていった。

マモリにとってフルアーマーの魔法とその武器や防具は父の形見でもあったため、その衝撃は大きかった。

「貴様は気づいていたみたいだな。女よ…」

老人はカイリの方に意識を向け、細い目をさらに細める。

「…今この街でマモリの存在や魔法を知らない人はいないのよ。それにあなたからはまだ魔力が感じられるわ。さっきの巨大ババロンもあなたの仕業ね？」

アイリは最初から違和感を感じていながらも、息子のマモリをみすみす老人に近づけてしまった悔しさにいらだっていた。

「その通りじゃよ。まああれはフルアーマーの力を見るための余興にすぎん。」

「余興？ あんなことしておいて…よくもそんな！」

「ふふ…今はそんなこと言ってる場合かのう？」

そう言われてアイリははっとしたようにマモリのもとに駆け寄る。

「…マモリ？」

「フルアーマー・真空剣！」

その呪文でマモリは一瞬緑色に輝く。しかし輝きがおさまってもマモリは全裸のままだった。

「フルアーマー・滅龍剣！」

さつきと同様体は光る。しかし鎧を装備することはできなかった。

「フルアーマー・破邪の槍！」

魔除けの武器を召喚しようとしても結果は同じ。

「…そんな…」

茫然とするマモリ。

「…どういうこと！？ フルアーマーはあの人がマモリに与えた絶対魔法のはずよ。呪いなんかでどうにかなるわけがないわ！！」

アイリも信じられないというように、またマモリの気持ちを代弁するように、老人を問いたです。

「わしの呪術をもつてすれば、いくら英雄ゼウの魔法であろうと呪える…と言いたところじゃが、それは無理じゃ。なのでその少年自身を呪わせてもらった。」

「マモリを…？どういうこと…!!？」

「ふふふ…それはの…男物を装備できなくなる呪いじゃよ。今あのフルアーマーで呼び出せる強力な武具のすべては英雄ゼウのものであるう？ゼウは男…しからばその装備は全て男物ということになるであらう？」

老人の言葉はまるで変質者のようで、不気味な笑いが混ざっていた。

その言葉にあっけにとられるアイリ。

「…なにそれ？じゃあマモリは男の子の服が着れなくなっちゃったの!？」

それは間違いなく、わが子のかつてないピンチだった。

「そついうことじゃ。」

「そんな…変態かよおまえー！」

さっきまで全裸で呆然としていたはずのマモリが大きな声をあげる。悔しさよりもありえなさに対するつつこみのようだった。

「変態じゃ。」

「返せよ！魔法も装備も全部父さんの形見なんだぞ!？」

後から悔しさが増してきたのか、涙目になっている。

「別に奪ったわけではないぞ。魔法も装備もお主の中に残っておるからのう」

「う…じゃあこれから一生…冬でも全裸で過ぐせつていつのかよ！
！？」

「わしも鬼じゃないからのう…そうならずに取り計らってやったん
じゃ。」

「…は？」

それがどついう意味かもわかっていながら、信じたくないという気
持ちで問い詰めてしまう。

「女子の物なら着れるということじゃ。…これからは少女として生
きていくがよい。フルアーマー…ゼウの子よ」

突きつけられた現実には、マモリはショックを隠しきれなかった。

5・スタートロイ城

「それでは失礼するぞ。目的は果たしたからの…」

「待て!!」

そう言つて老人は杖に乗つたまま空高くまで上昇して行つた。

マモリの声に反応することなく、すでに次の仕事を頭に思い浮かべているようだった。

「…マモリ…」

自分の息子の将来について真剣に対策を考えながら、アイリはマモリに声をかけた。

しかしマモリはうつむいて立ち尽くしたままだ。

「…ふう………まあいいじゃない!男の子の服が着れなくなったただけでしょ?だったら女の子の服着て過ごせばいいのよ!…母さんはいいわよ。ていうかマモリは可愛いから、前から女の子の服を着せたいなつて思つてたのよ。これからは娘として…ね?」

気楽な性分の母はすでに楽しみになっている。その想いとマモリを慰めたい想いがごっちゃになっている。

「…親としてそれでいいの…?」

母の変わり身の早さにあっけにとられるマモリ。

気を取り直し、近くにあった布切れを体に巻きつけてアイリと一緒に城に向かう。

<スタートロイ城>

巨大ババロンに襲われ多くの人が怪我をし、国民全員が城の中に集まっていた。

だがもともと結束の強い国で、傷ついた人たちの手当ても早く、すでに活力を取り戻していた。

城内では大臣たちが各所に指示し、壊れた家の建て直しや今後の対策など迅速な動きを見せている。

マモリも巻きつけた布を揺らせながらアイリと一緒に城の門をくぐった。

そこで待っていたのは、国の王子と数人の兵士だった。

「あら、ジード王子！」

アイリが王子に挨拶をする。とても王族と一般人とは思えないラフな挨拶で。

そっというラフさがまかり通るのも、この国の良さだった。

ジード王子はスタートロイ唯一の王家の跡取り。

現在は25歳で国のために早く結婚相手を見つけると父にうるさく言われている。

「お怪我はありませんか？」

「ええ…大丈夫よん」

ジードは隣のみすばらしい少女のような少年の顔を見て、それがマモリだと気づく。

「マ！マモリ！どうしたんだ、その格好は…！？」

ジードとマモリは小さいからよく一緒に遊ぶ兄弟のような関係だった。

というのも、英雄の家族としてマモリとアイリはよく城に招待されることが多かったからだ。

いつも鎧姿で活躍するマモリをよく知っているため、布切れ1枚のマモリの姿には驚いた。

「ああ…後で話すよ。それより街の人は？」

「それなら大したことはない。死人も出ていないしな。おまえのおかげだ。」

「それはよかったわ。ところでジード王子…国王様にお目通り願える？」

アイリは相変わらずの笑顔で国王への面会を要求する。

とてもさつきまで大型の魔物と戦っていたとは思えない。

「それはかまいませんが…」

「ちょ、母さん！」

「マモリもずっとそんな格好じゃいられないでしょ？」

そう言ってアイリは一国の王子を早くといわんばかりに引っ張って行った。

<国王の間>

スタートロイ王は難しい顔をして窓からさつきまで巨大ババロンが暴れていた場所を見つめている。

「…この国も…もっと…」

物思いにふけるのを遮るように、勢いよく扉が開く。

「失礼します、父上！アイリ・マモリの両名をお連れしました。」

「入りたまえ」

3人が室内に入る。もちろんマモリは布切れを巻きつけたまま。

「マモリ…また国を守ってもらったな。…いつもすまない…兵士でもないお前に…」

王という立場も気にせず、スタートロイ王は少年に頭を下げる。

「いいよそんなの…それより…」

言いかけてマモリは言葉を詰まらせた。顔も真っ赤になっている。それを見たジードが心配そうに顔を伺う。

「…どうしたのだ？…その格好…」

続きを話し出したのはアイリだった。最もアイリもそのつもりで王様の前に来たのだが。

「実はうちのマモリなんですけどね？ちょっと呪いにかけてしまったんです。」

と、それほど深刻なことでもないような言い方でぶっちゃけるアイリ。

「なんと！」

「呪い！？」

「まあ一応報告しておきますと、さっきのババロンは呪術師の仕業だったんですよ。黒魔法でこの近辺のババロンを合成させたものだ

ったようです。」

「ということは、その呪術師がマモリを？その呪術師は？」

「逃げられました。でももう来ないと思いますよ。目的は果たしたって言うていたし…まあその目的がマモリを呪うことだったみたいですけど。」

国王もジードも、事態を想像しながらアイリの報告を真剣に聞いていた。

マモリは相変わらず赤くなっただけだ。

「まあ…ご想像通りだと思いますが、フルアーマーの魔法を狙ってたみたいなんですよね。」

「…うむ、だがあの魔法は取り出すことも呪うこともできないはずの絶対魔法だろう？」

「ええ、だから呪われたのはマモリ自身なんです。…その…男の子の服が着れない呪いをかけられちゃって！」

マモリは耳まで真っ赤になった。

「なんと…それでゼウの鎧が着れなくなったということか…」

「そうですね。まあそういうわけなんで、国王様にはマモリの服を用意してもらいたくって。女の子の服を。」

「ええ！？母さん！！！」

まさかここでというように、マモリは声を上げた。

「だってしょうがないでしょう？このままずっと布だけで生きていくの？」

「それは…」

「マモリ…」

ジードは複雑だった。ジードは以前からマモリの可愛さに想うところがあったからだ。

マモリのピンク色の髪、白い肌、重厚な鎧を着こなすのが信じられないほどの細い体。

それはその辺の街娘よりもずっと可愛らしいのではと思い続けていたのだった。

もつとも、そう思っているのは、ジード以外にも何人もいるわけだ
が。

「わかった。では20着ほど服を用意させよう。下着もな。」

「ありがとうございます。」

「…ちょっと待ってください！」

特に動揺もなく事態を飲み込んでしまったところか、下着まで用意すると言つ国王の発言に焦り、マモリも打って出る。

マモリはもとと一生布だけで生きていくつもりも、一生女の子の格好で生きていくつもりもなかった。

まあ中身は年頃の少年なのだから当然である。

「どうしたの、マモリ？ やっぱり女の子の服は嫌…？」

「そうじゃなくて… ってそりゃ嫌だし恥ずかしいけど… そういうことじゃなくて…」

「？…じゃあ何？」

「この呪いを解くとか… そういう方向性はないのかよ！？」

マモリはなぜみんなあつまり受け入れるのかずっと疑問だったため、
ついにその問いを投げかけたのだった。

「それは難しいわね。呪いっていうのはね、術者にもリスクがかかる危険なものなの。その分強力な魔力が込められていてね。呪いをかけた本人にしか解けないようになってるのよ。」

「そんな…」

まあなんとなくそんな気はしていたマモリだが、今は小さな希望が打ち砕かれた思いだった。

「ま、諦めて娘になっちゃいなさいよ。母さん、マモリなら絶世の美女になると思うけどな。」

ジードが内心で激しく同意する。

「やめてくれよ！…だったら…あのじいさんを探す！」
もうマモリに残された道はそれしかなかった。

マモリにとって女の子としての生活なんてありえない。

「何言ってるのよ…どこに行ったかもわからないでしょ？」

「そうだけど…このままなんて嫌だよ！それにあのじいさんが飛んでいった方向はちゃんと見てたんだから！」

アイリは自分の息子を娘にすることにためらいがない様子だが、マモリも引くわけにはいかない。

「それはだめだ！マモリはこの国にいないと！！」

そう言ったのはジードだった。

「なんでだよ。俺が強い力を持つてるからか？でももうそれが使えなくなっただぞ！？」

ジードはもちろんそういつつもりで言ったのではなかったのだが、マモリにはその気持ちは伝わるはずがない。

6・初めての女装

マモリの強い要求に、一同は戸惑っていた。

その理由はマモリと離れたくない、危険にさらしたくない、この国を守ってほしいという想いの他にもあったからだ。

アイリと国王の目が交差する。

そしてアイリはため息をつき、マモリの方に向きなおった。

「やっぱり…どうしようもない運命なのかもね…マモリ」

「は？」

まるでこうなることがわかっていたように、アイリはマモリに微笑みかけた。

「国王様…この子とお別れの時が来たみたいです。」

いつになく真剣な表情になるアイリ。

「…そのようだ…。国としても、これ以上マモリに負担をかけまいと体勢を整えていたところだ。…いい時期かもしれんな。」

国王も同様に真剣な表情でマモリを見つめる。

「私も…用意はできています。」

「おいジード、この2人…何の話をしてるんだ…？」

勝手に話を勧める母親と国王についていけず、ジードに助けを求める。

だがジードにも訳がわからない会話だった。

「さあ…それよりマモリ！まさかこの国を出るつもりじゃないだろ

うな!!?」

「あのじいさんがもつと遠いところに行ったんだ。俺も行くよ。俺、ずっと女の格好なんて嫌だもん。」

「…マモリ…」

マモリが遠くに行ってしまう。それだけはマモリの言葉からも国王たちの会話からも理解できた。

ジードの言葉を遮ったのは国王だった。

「誰か!宝物庫の奥のあれを持って参れ!」

続いてアイリも、穏やかな顔でマモリの前に立つ。

「マモリ…これでフルアーマーの魔法を使いなさい。」

そういつてアイリは左手に魔力をこめ、空間に小さな穴を作る。その中に右手をいれ、開いた空間から一本の剣を取り出した。

「これは守護の剣…聖剣イージス。お父さんが私とあなたを守るようにくれた剣よ。」

「父さんが…?」

「さあ…この剣でフルアーマーの魔法を使いなさい。」

「…でも…フルアーマーは…」

そう言われてアイリはマモリが父の装備しか使ったことがないのを感じだした。

「大丈夫よ。フルアーマーの武器と防具はセットなの。知ってるでしょ?新しい武器を手にしてフルアーマーを使えば、その武器に合った服や鎧が精製されるわ。」

「そう…だったんだ。」

「マモリは今男の服が着れない呪いにかかっているから、精製されるのは女の子の服だと思うけどね。」

アイリはまたいつもの笑顔で、でも少し淋しそうに言う。

「…てことは、これでフルアーマー使ったらどんな格好になるかわからないってことか…。恥ずかしいのや、変なのになったら嫌だな

…」

フルアーマーの知らなかった機能は理解して、こんどは不安が大きくなる。

「大丈夫よ！ずっと母さんが持ってた剣なんだから。きつと凄く可愛い衣装が出るわよ！」

もはや鎧ではなく衣装と言い出す母。

「マモリ、母さんの愛と…父さんの魔法を信じなさい」

マモリの両肩をポンと叩き、今までにないくらいの笑顔を見せる。

「……わかった。」

そう言っマモリは魔力を手の内にある聖剣イージスに込め始める。腹をくくったようだ。

「フルアーマー……イージス！」

マモリの体が七色に輝き出し、纏っていた布切れが宙を舞い、マモリの体が新しい素材に包まれていく。

やがてマモリから発せられていた光が消えていく。

光が消え、そこに立っていたのは紛れもなく美少女だった。

肩と胸には鎧と言える金属アーマーがついているが、丸みを帯びて可愛いデザイン。

その下ではスクール水着のような藍色の布が腰のくびれを強調している。

淡いスカイブルーのスカートはプリーツ状になっており、太ももの半分の位置で布がなくなっていた。

さらに下には黒のニーソックス。その絶対領域はマモリが男とわかっていても、ドキドキさせるのに十分だった。

一瞬その場が沈黙する。

「……！」

マモリは下を見て自分の格好を見てとても恥ずかしくなり、母や国王に背を向けてしゃがみこんだ。

ミニスカートなどはいたこともないのだから、普通にしゃがめばスカートの中が見えてしまうことなどわかるはずもない。

運悪くその先にはジードが立っていた。

「……！」

スカートの中を確認するジード。白い生地レースをあしらった可愛らしいショーツ。

そして女の子にはあるはずのない膨らみ。

ジードは溢れ出そうになる鼻血を理性で止める。さすがは一国の跡取り。

「か……か……か……！」

マモリは後ろの声に一瞬肝が冷えた。

「カワイー……！！マモリー……！！」

案の定ハイテンションになった母親が抱きついてくる。

「マモリすごく可愛いわよ！ああ…さすが母さんの娘だわ！」

「娘じゃないから！」

「ねえ！下着はどうなってるの？どんないやらしい下着はしてるのよ！」

「人前でそういうこと聞く！？それでも親か！」

アイリは楽しくてしょうがない。

「それに自分でも見てないんだからわからないよ…」

「じゃあスカート捲って見てみなさいよ！」

「できるかぁ！！！」

一人スカートの中知っているジードは、何とも言えない優越感に浸っていた。

「オホン」

国王の咳払いで、アイリも我に返り、また真剣な表情に戻る。

すると、扉が開き、大臣が一人入ってくる。

「陛下、あれをお持ちしました。」

「あれ？」

7・父の遺品

大臣が持ってきたのは小さな箱だった。中心に大きな宝石が埋め込まれており、そこから四方に溝が掘られている。

「うむ。それをマモリに。」

大臣はマモリの姿に少し驚いたようだったが、その件には触れず、静かにマモリに箱を渡した。

マモリはその箱を持った瞬間、不思議な感覚にとらわれる。まるでこの中に引きずり困れるような。

でも怖くはない、優しさに満ちた。

この箱を手にするのをずっと待っていたみたいだった。

「マモリ…その箱に魔力を込めて、フルアーマーを唱えなさい。それの名前は…ガメイラよ。」

「ガメイラ…」

マモリはこんな箱でフルアーマーが使えるのかと疑問に思いながら、魔力をこめる。

すると箱の中央の宝石が光だす。

マモリはさっきの感覚を思い出し、フルアーマーを唱えた。

「フルアーマー・ガメイラ！」

箱の宝石がより強く光だし、その光が四方の溝に走る。箱全体が光、蓋の部分が宝石と一緒に消えていく。

と思つたら勢いよく中から何か飛び出し、マモリの首に巻きついた。その物体は少しずつ形を整えていき、ペンダントの形になってマモリの胸元に落ち着いた。

「…これは？」

「それは人格魔導具、ガメイラ。これからあなたを助けてくれるわ。」

「人格…魔導具…？」

「ええ、今はまだ眠っているみたいだけど、じきに目を覚ますわ。」
「目を覚ま…え…？」

その様子を見て安心したように国王も口を開く。

「それはお主の父が戦いに行くとき、私に預けて行つた物だ。もしもマモリがこの国を出て行くことがあれば、渡してほしいと。」

聖剣イージスに続き、またしても父の遺品。マモリは胸元のペンダントを見つめ、さっきの感覚は父の魔力が残っていたのだと思つた。

「それで…これってどういう物なの？」

「ガメイラが目を覚ました時に、きつと教えてくれるわ。ただ一つだけ言つておくと…そのガメイラは知識と記憶の塊のようなもの。」
そういつた母の目には少し涙が溜まっていた。それが珍しかったのか、マモリはどうしていいかわからず、黙つてしまう。

「マモリよ…すぐに行くのか？」

国王の言葉ではっとする。

「え？ああ…そのつもりだよ？じゃないと追いつけないかもしれないから。」

「な！本気か、マモリ！？外は危険が…」

「ジード……！」

慌てる王子様を国王が静止する。

「お前の気持ちもわかる。だがこれも運命なのだ。」

そんな大袈裟な…。

マモリはそう思いながらも回りの事の運びに圧倒されてつつこめなかつた。

マモリは軽くあの老人を捕まえて、呪いをしてすぐ帰るつもりなのだから当然である。

今度は侍女がきらびやかなドレス等、たくさんの服を持って来た。

「持つて行くがよい。フルアーマーの魔空間に入れておけばいくらでも持つていけるのだろうか？」

「え！… 知らないよ！すぐに戻って来るんだし…」

「まあいいじゃない。もらっておきなさいよ、マモリ！もし本当に要らなくなったら私が貰うから。」

そう言つてアイリは勝手に服を受け取つた。

マモリも仕方なくフルアーマーの魔空間を開き、その中に服を入れていく。

8・旅立ち

スタートロイは小さな国。そのため外交を含めてよく国の外に出ることもあった。小さな村や街もある。
マモリたちも例外ではない。

だからマモリはいつものようにお使いに行って帰って来るつもりだけのつもりだった。

「まあ…色々もらっちゃったけど、呪い解いたら…すぐ帰ってくるから！」

「…そうね…待ってるわ、マモリ。」
アイリはまた泣きそうになっていた。

「気をつけてな。」

「マモリ！…私がついてってやろうか？」
ジードは以前からマモリのことを意識していたが、今のマモリを見て一層離れるのが不安になっていた。

「なんでだよ。すぐ帰ってくるからジードは残って嫁さん探せって！」
「ぐっ！」

「そうだぞジード。明日には同盟国のメザーレイアから姫君が訪れる。お前がおらんでどうする。」

「…わかった。マモリ、すぐに帰ってこいよ！」
ジードはしぶしぶマモリの出発を了承した。

「じゃあ母さん、俺やっぱり娘になる気もないし、父さんの武器も
つと使えるようになりたいから…行ってくるよ!」

「ええ…行つてらっしゃい。マモリ…」

こうしてマモリは部屋を、城を、そして国を後にした。
持てるだけの食糧と、ある程度のお金を持って。

慣れないスカートのまま。

たった一人で…。

「…予言が、当たってしまいましたな。」

「はい、まさかこんな形で…こんなに急に…」

さっきまで堪えていた涙を流し、城の窓から娘の姿をした息子を見
送るアイリ。

「新しい英雄の誕生となれば良いが…」

「きつと…あの子なら大丈夫です。どんな困難も乗り越えますよ。」

…彼女がついているし、何より…あの人の息子だから…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219y/>

フルアーマー・クロストレス

2011年11月4日05時21分発行